亜智一郎の恐慌（あともいちろう）

泡坂妻夫

双葉社

亜智一郎の恐慌

双葉社

亜智一郎（あともいちろう）の恐慌

著　者　泡坂妻夫
発行者　井上功夫
発行所　株式会社双葉社
東京都新宿区東五軒町三―二八　〒一六二
電話（〇三）五二六一―四八一八（営業）
（〇三）五二六一―四八三一（編集）
振替　〇〇一八〇―六―一一七二九九
印刷所　大日本印刷株式会社
製本所　株式会社若林製本工場
落丁乱丁の場合は本社にてお取りかえします。
定価・発行日はカバーに表示してあります

©泡坂妻夫　1997年　Printed in Japan

ISBN4-575-23322-6 C0093

目次

雲見番拝命　5
補陀楽往生　49
地震時計　85
女方の胸　121
ばら印籠　155
薩摩の尼僧　191
大奥の曝頭　229

装幀　大路浩実

模様作成　泡坂妻夫

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook

亜智一郎（あともいちろう）の恐慌

雲見番拝命

もし、その前兆があったかと訊かれたら、緋熊重太郎はためらうことなく、杜若の出来が只事でなかった、と答えたろう。

それほど、門脇杜若は美事だった。

近来、稀というより、重太郎が今迄観た狂言で、これほど気持良く酔えた芝居はなかった。大出来、頗る付き、極上上大吉、いくら誉めても誉め足りない。

経師屋橋之助を演じた杜若も杜若なら、相手、柳橋の芸者若鳴役の青衣霧之丞がまた絶品。若鳴は並み外れの悪女なのだが、これまでにはなかった型で、深い怨みもなく美しい顔を崩さず次次と人を殺す。それが怪しくも爽快で、初日から物凄い評判を呼び、二日目のこの日は満員札止めの盛況だった。

「明日も小屋が壊れなきゃいいがな」

と、重太郎が連れの岩沢二亭に言った。

「これも、緋熊様のお蔭ですよ」

二亭も上機嫌だった。無論、酒のためばかりではない。

「緋熊様のご助言がなかったら、経師屋橋之助を台本にしようとは考えなかったでしょうから」

「いや、今のあんたと杜若、霧之丞がいたら、何を芝居にしても文句なしだ。俺の助言などなくたっていい」

重太郎は珍しく謙遜した。

普段は大風なのである。無理にでも嵩高な態度をとる。好きな芝居を只で見るためだ。

重太郎は江戸城大手門の下座見役、ごく下っ端の番侍だ。毎朝四つ（午前十時）に太鼓とともに門が開く。大名旗本はここで乗物や馬から降り城内に入る。そのとき、登城する諸大名、旗本の定紋や槍印をいち早く見て、家格を判断する番侍が下座見役だ。番所の役人は相手の家格に従って礼遇しなければならない。

茅場町の組屋敷に呑気な独り住まい。城へは二日勤めて次の一日が明番。暇があると、つい浅草猿若町へ足が向く。どういうわけか芝居が好きでならないのだが、薄給の身だから思うように芝居通いができない。何か良い方法がないだろうかと思っているところへ、宮前座で葵霧之丞という役者が目にはいった。

霧之丞はまだ端役だったが、重太郎は一目見て、これは大した資質を持っている若手だと見抜いた。だが、その役者の葵という姓と、そのとき着ていた衣裳の「丸に三つ葵」の紋が気になった。下座見役だから遠目はよく利くのだ。

早速、楽屋へ行って、頭取を呼出し、役者如き分際が御所様のご紋名を姓として名乗り葵のご紋を用いるとは何事だ。お奉行所の耳にでも入ったら宮前座はお取潰しになること必定だと脅した。頭取は慌てて重太郎を料亭へ案内し、なにがしかの金包を渡し、どうしたら良いでしょうと訊いた。重太郎は充分に酒と料理を食らってから、

「なに、姓の字を青衣とでも変えりゃいい。紋はそのまま。もし、難を言う奴があったらこれは葵と似てはおりますが河骨でございますと言い逃れなさい」

と、教えた。

葵と水草の河骨の紋はよく似ていて、素人が見たぐらいでは区別が付きにくいのだ。
頭取が礼を言うと、重太郎は付け加えた。
「世の中には自分ではそう思わなくとも、識らず識らずのうちにお上に差し障るようなことをしているときがある。今度のようにささいなものでお咎めを受けては詰まらねえから、今度はときどき俺が見に来て、何かがあったら注意してやろう」
それ以来、重太郎は宮前座の木戸ご免となった。
宮前座の楽屋へ出入りしているうち、戯作者の岩沢二亭とも識り合いになり、何かと相談を受けるようになった。
今度の狂言「吉一新過日経師」も、元元は講釈だったのを、これは杜若にぴったりの役だから盗んだらどうかと、重太郎が二亭を唆したのだった。
それが当たったので重太郎は悪い気がしない。楽屋ではとかく煙たがれる存在なのだが、今日ばかりは重太郎が来るのを待ち兼ね、芝居が跳ねると二亭は駒形の茶の市に誘ってくれた。
昼のうちは雲が多くときどき小雨が降ったりのはっきりしない天気だったが、茶の市を出る頃にはすっかり雨が上がり、いつもより星が大きく見えた。初秋にしては暖かく、ちょっとした残暑が帰ってきた感じだ。
「緋熊様はわたしなどよりずっと前に霧之丞に目を付けられていらっしゃった。どうも、偉いものです」
と、二亭が言った。

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook

重太郎はちょっと得意気で、
「人には勢いのある時期がある。その人達が集まると、勢いは十倍にも二十倍にもなる。宮前座は今がその時期だと思う」
と、気取った言い方になる。
「失礼ですが、全く侍にして置くのは勿体ない方ですな。いかがです、一つ台本をお書きになりませんか」
「同じ世辞なら、役者になりませんかと言えねえのか」
「いや、お世辞などではありません。以前から書ける方だと睨んでいますよ」
「なんの。俺が書いた台本を読めばあんたが鼾をかく」
筋違門をくぐったところで、重太郎は二亭と別れた。
しばらく、二亭の言葉が耳に残っていた。戯作も悪くないと思う。しかし、二亭が机にかじり付いて、うんうん唸っている姿を見ているから、本気で台本を書く気にはなれなかった。好きなとき芝居を見、言いたいことを言い、ときどき馳走になって小遣いを貰う。その方が何層倍も楽なはずだ。
二亭と別れて間もなくだった。あたりが妙にもやもやした気配になった。酔いにしては妙だと思っていると、中空を雲が覆い、星の光が消えた。
遠くで夜廻りの拍子木が聞こえた。もう四つ（午後十時）か、と思ったとき、急に強い風が起こると同時に、身体が地面に跳ね上げられ、立っていることができなくなった。

地鳴りか家の崩れる音か、凄まじい響きで地面がひっくり返ったようだ。生きた心地もなく道にうずくまっているしかない。どれほどそうしていたか。しばらくすると、揺れは静かになった。思わず振り返ると、たった今、通って来たばかりの筋違門が消え失せていた。あの石垣が崩れ落ちたと思った瞬間、重太郎の全身が震えだした。

安政二年十月二日の夜、江戸全土を襲った地震は直下型でマグニチュード六・九、国際震度階十二であったといわれる。震源が江戸市街の直下、しかも浅いところだったから、その被害は壊滅的で、しかも、地震直後に各地で火災が発生、焼失家屋十万以上、死傷者一万五千を超す大惨事となった。

この地震で猿若町では楽屋新道、役者新道数百軒、裏店までがことごとく焼け落ちた。

重太郎は這いずるように歩き出したが、激しい余震が繰り返し襲い掛かる。その度に瓦屋根が崩れ、材木が土埃とともに倒れかかる。

命からがらという体で酔いも醒め、やっとの思いで茅場町の組屋敷へたどり着いて見ると、附近の屋敷はほとんど倒壊していたが、重太郎の住まいだけは瓦を落としたものの、辛うじて助かっている。

だが、ほっとする間もない。屋敷の侍はそれぞれ火事装束に身を固め、大手門へ駆け付けるところだった。それなら、安全な場所で愚図愚図している方がよかったと思ったが後の祭。

組頭は五千石の旗本、まだ若く元気が良い。ここぞとばかり、鍬形の前立を付けた兜に胸当て火事羽織、緞子の野袴で馬に打ち跨がり、先頭になって大手門へ。

すでに、門前の大名屋敷のあちこちが崩れ落ち、火の手が見える。石垣が一部堀の中に落ち込んでいる。櫓門は無事だったが、番所は半分傾いたままだ。

番所には鉄砲、弓の他、竜吐水、掛矢、梯子、鳶口などの火消道具も備わっている。組頭の下知でそれ等を引き摺り出そうとしたとき、運悪く余震が来た。

重太郎は家鳴りとともに落ちて来た太い梁から辛うじて身体を躱したのだが、瞬間、遅かった。掛矢を握った左腕を噛まれてしまい、押すことも引くこともできなくなった。激痛が走り、気が遠くなりそうだ。

「た……助けてくれ」

必死で叫ぶのだが、誰も気付かない。見ると火の粉が櫓門に降り掛かり、全員が櫓門の消火に行ってしまったようだ。火の粉は重太郎の頭上にまで飛んで来る。悪くすると生きたまま丸焼きにされそうだ。

まだまだこの世に未練がある。芝居が観たい。旨いものが食いたい。女も——

「助けてくれ……」

そのとき、人影が近寄って来た。天の助けだ。重太郎は最後の力を振りしぼった。

「お願いだ。助けてくれ」

人影は傍に立って重太郎を見下ろした。

「どうなさった」
「梁に腕を取られてしまった。動くことができない」
遠くの焔が男の横顔を照らした。その丸い顔に見覚えがある。三の門の番侍、甲賀百人組の一人で藻湖猛蔵という名物男だ。
役小角を祖とする甲賀忍者が名を馳せたのは戦国時代。関ヶ原では伏見城に籠城して家康を助けた。そのときの働きが認められ、家康は甲賀忍者百人を江戸城本丸、大手三門の番士とした。これが甲賀百人組だが、以来、二百五十年もの泰平のうち、忍者はすっかり忍法を忘れ去ってしまった。安政の頃にはただの平凡な番士の集まりで、肝心な諜報活動は休息、吹上お庭者、いわゆるお庭番にお株を取られた形だった。
だが、百人組の中には、ときとして先祖返りのような男も出現する。それが藻湖猛蔵で、この男は日頃祖先の智勇を誇りに思うと同時に、腑抜け同然となった百人組を慨嘆していた。そのことから、独自で忍法の復活を考え、秘伝書や古老の話を頼りに、とうとう忍法百般を会得したという。以来、何かの折にその術を使いたい様子なのだが、生憎世の中は泰平。だから、猛蔵の顔はいつも苛苛している。
顔は丸いが風格は古武士そのまま。身形りに構わず近寄ると汗の臭いがしそうだ。そんな風だから他の番侍とは反りが合わない。猛蔵の方も惰弱な侍には目もくれない。
同じ大手門の番侍だから、重太郎は猛蔵を識っていても、威張った人間はあまり好きではない。声を掛けたこともないのだがこの場合は別だ。野暮ったい猛蔵がひどく頼もしく見えた。

「よし、待っていなさい」
猛蔵は一抱えもある梁に手を掛けた。すぐ、丸い顔が真っ赤になって倍にもふくれた。だが、梁の上には材木や瓦が二重三重に押し合い、さすがの猛蔵の力でもびくともしない。
猛蔵は梁を動かすことができないと判ると、今度は重太郎の腰に手を掛け、物凄い力で後ろに引いた。
「あっ、痛い。腕が抜けてしまう」
と、重太郎がわめいた。
「静かにしなさい。あなたも、武士でしょう」
「武士でも、痛いものは、痛い」
猛蔵は手を放して立ち上がった。
「あなたは、下座見さんだね」
「左様、何とかなりませんか」
火の廻りは早い。すでに、番所の一部が火を噴き始めていた。
「こういう事態になった以上、覚悟をしなさい」
と、猛蔵は重太郎を見下ろして言った。
「覚悟しろとは……このまま捨てて行くと言われるのですか」
「いや、見捨てにはできない。あなたも犬死は嫌でしょう」
「では?」

「空いている右手で、嚙まれた腕を斬り落とすのです」
「斬る……」
「左様。それ以上、手立てはありますまい」
猛蔵は平然と言った。重太郎は蒼くなるのが自分でも判った。第一、自慢ではないが刀を抜いて人に向かったこともないのだ。
「早くしないと、煙に巻かれますぞ」
「しかし……わたしにはできそうにもない」
猛蔵は渋い顔をした。
「腕が切れぬようでは、腹も切れぬではありませんか」
「そういう話は聞くと寒気がします」
「……やむを得ない。手を貸しましょう。ただし」
「ただし？」
「その傷が元で死ぬようなことがあっても、わたしを怨まないように」
「勿論です。怨むなら鯰の方を怨みます。他人に訊かれたら、自分で斬ったと言います。藻湖さんの名は絶対に出さないように約束しましょう」
「判った」
となると行動は早い。猛蔵は手拭を引き裂き、重太郎の左上膊部に固く巻き付け、更に木片を拾って来て手拭に差し込み、きりきりと捻じりあげる。

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook